

オーテス・ケリー

大学名誉教授に聞く

ケリー家と同志社

聞き手

河野 仁 昭

小樽の家

——小樽へ行っておられたようですね。

ケリー 土曜と日曜だけだったけど……。

——先生は小樽のお生まれ（一九二二年十月二十日）で、少年期を過ごされたのですから、思い出になるものがあるのではないですか。

ケリー そりゃあるよ、なにもかもね。

——生まれたお家はいまも残っていますか。

ケリー おとし 一昨年だったかな、潰されました。

——残念ですね、丘の上のいい所にあつて、市長公舎になったりしていたのに……。あの家はケリー先生のお父さんが牧師をしておられた頃に建てられたんですか。

ケリー もっと前、明治末期かな。ドイツの商人かなにかが建てて住んでいたのを、ミッションが買ったものです。第一次大戦で商売が駄目になったとかで……。一九一九（大正八）年ごろかな？ 多くの父が赴任したのは一九二〇年だから、妹もそこで生れたんだ。父は牧師というより宣教師といったほうがいいけど。

——お父さんは何年まで小樽におられたんですか。

ケリー 一九三七（昭和十二）年までだったかな。

——先生は何歳まで？

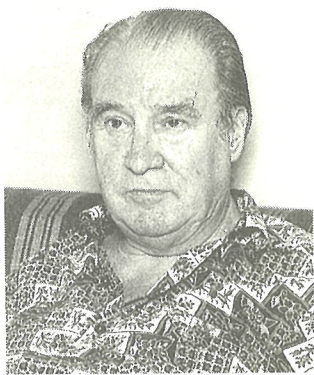
ケリー 尋常小学校四年生まで（笑）。それから家族とシベリア鉄道でアメリカへ一年行つていて、日本へ帰ったら神戸のカナディアン・アカデミーへ入れられて、そこで四年間……。

——神戸から休暇を過ごしに日本海まわりの汽車で小樽へ帰られたり……。

ケリー そうそう。三十六時間かかった（笑）。

祖父オーテスと岡山

——ケリー家と日本の縁はおじいさんのオーテス・ケリーに始まりますね。おじいさんもオーテス、先生もオーテス。話したり書いたりするとき、おじいさんのことか先生のことか、いちいち断わらねばならんで（笑）。ケリー もう一人いるんだ。オーテスが。どなたですか。



オーテス・ケリー名誉教授

ケリー 祖父の父（笑）。

——すると曾祖父が一世、祖父が二世、先
生が三世……。

ケリー そうです。それからぼくの父がフ
ランク、私の息子がまたフランク。ケリー家
は隔世遺伝や（笑）。

——おじいさんが日本へこられたのは、確
か明治十年ですね。

ケリー そう、一八七七年だから。

——当時、アメリカン・ボードの宣教師は
D・C・グリーンがいた神戸へ来ますね。神
戸ステーション。それからすぐ岡山へ行っ
たんでしょうか。

ケリー 岡山の高崎五六という県知事がな

かなか熱心な啓蒙家でした。彼は外国人に來

てもらって外国の文化とかキリスト教といっ
たものを県民に教えてもらおうというので、

ちよいちよい岡山へも行っていたJ・C・ペ
リーに頼んだわけだ。「じゃア、アメリカン・
ボードから派遣しましょう」というわけで、
祖父に「君、若いんだから行ってくれ」と。

——J・H・ペティー夫妻、J・C・ペリ
ー夫妻が行きますね。岡山ステーションを
つくる。おじいさんは何歳ごろですか。

ケリー 二十代の半ばですよ、一八五一年
生まれだから。岡山にはもう一人婦人がいま
した、ウィルソン女史です。祖母とミス・ペ
ティーはまたいこです。だからいっしょ
に行ってくれ、ということもあったようです。

この人たちが岡山に住み始めた最初の西洋
人で、神戸から行ったときは、変な所に住ま
せて問題が起こっちゃいかなというので、数
カ月、知事公邸の中の一戸建ての茶室に住ま
せてもらった。知事さんとこに住むぐらいだ
から悪い人たちじゃないんだと県民に思っ
てもらいためなんだ。それからどこかに日本の
家を借りて……。

——建てたんじゃないんですか。

ケリー 建てたのはもつとあとで……。

——東山公園あたりに建てたようですね。
立派な異人館なんで、四国の高松あたりから
わざわざ見にくる人がいたという話を岡山で
聞きました。

ケリー それは知りませんア。

——岡山へは早くから金森通倫が行きます
ね。

ケリー 金森と協力して、岡山県下にわら
じ伝道ということを祖父はやったわけだ。

——高梁とか笠岡とか……。

ケリー そうそう、県下のあちこちね。祖
父はそうだったこととか、勉強などこつこつ
やるのが好きな質でしたから。社会問題とか
孤児院のことなどもその一つです。

——岡山の孤児院は石井十次がつくったの
ですけど、協力関係はあったでしょうね。明
治二十九年だったか、岡山ステーションの敷
地を石井の孤児院にゆずりますね。

ケリー そういうこともぼくは余り詳しく
は知らないし、祖父からではなくて父から聞
いた話だけど、その孤児院に印刷工場があっ
て、英語の活字だってちゃんと持っていた。

——英語の印刷もできた？



岡山時代の祖父オーテス夫妻

ケリー そうなんです。そういう印刷ができるってなんて岡山にはそこしかなかった。祖父は『ヨブ記』のヘブライ語の原典を英語に訳して、しかも訳を詩にしていまして、孤児院の印刷所できれいな本を造っています。この本は希少価値があるので、ついこの前も古本屋から広告が来ました。

祖父オーテスと新島襄

——ケリー家はおじいさんから先生まで、三代アーモスト大学出身ですね。おじいさんは新島といっしょだったとか。

ケリー 祖父の卒業は一八七二（明治五）年、新島が一八七〇年でしよう。二年間も同じ大学にいたんだ。

——二人は知り合っていたんですか。

ケリー そうです。一緒に近くの農園へいたずらに行ったりしたと、ぼくは聞いていますけどね。

——どんないたずらをしたかはお聞きしないことにします（笑）。年代的にどうなるか、二人はアンドーヴァー神学校に学びますし。

ケリー 祖父はアーモスト大学を出てから二年ほど教師をしていました。そのうちに信仰の道に入る決心がついたものだから神学校へ入った（新島は一八七四年修了、オーテスは一八七七年修了）。

神学校を了えて、アメリカン・ボードに宣教師の申し込みをしたとき、行き先希望欄に「ジャパン・オア・アフリカ」と書いた。そしてたまたまに「ジャパン」になって（笑）。ジャパンのことは新島から聞いたり、いろいろ勉強もしてかなり知っていたわけ。

——日本といえば新島、ということはあるたでしょうね。「またあいつに会えるな」とか。ケリー そうだったと思うよ。

——おじいさんは日本へ来る年にエレン・マリア・エマソンと結婚して、新婚はやばやだったんですね。

祖父オーテス同志社へ

——岡山には何年間ぐらいおられたんですか。

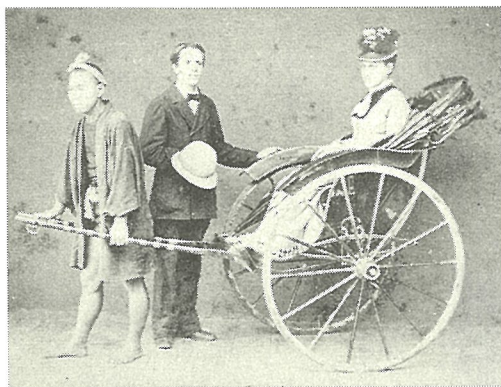
ケリー 十年です。

——新島との関係でいえば、日本へこられたとき同志社の教員にならなかったのがむしろ不思議なくらいですが、これは岡山ステーション開設の関係でしょうね。実際に同志社神学校の教授に着任されるのは一八九二（明治二十五）年？

ケリー いや、その前の年でしょう。

——岡山出身の河本乙五郎という学生がいたんですが、彼は明治二十（一八八七）年十一月三日におじいさんから洗礼を受けています。それはケリー博士が「岡山を去り帰米休養さるゝ直前」だったと書いているんです。一度アメリカへ帰られて……。

ケリー 一年間の休暇のようなもので……。その前に同志社から来てくれという話



岡山時代の祖母

があったんですよ。学生たちが聖書や神学も結構だけれども、もうちょっと社会の問題も教えてほしいと言いつつ勉強をしているから岡山のケリーがこつこつ勉強をしているからいいんじゃないかということだ。

——社会の問題と言いますと……。

ケリー 社会学です。出来たばかりの学問なんですよ。だから、それを教えるために

は少しウォーミング・アップが必要だというんで、その目的もあつて家族を連れて、ヨーロッパを回って帰ったんだ。

——岡山で一緒に働いていたJ・C・ペリーは医者ですけど、社会問題にすごく関心があつて、監獄改良について日本政府に意見書を出したりするでしょう。日本の社会福祉の草分けだといわれている。そのペリー先生からおじいさんが影響を受けるといったことは考えられませんか。

ケリー それはお互い影響しあつたでしょうよ、似たような年だったし、仲もよかつたから。ペリーはアメリカへ帰ってから（一八九五年）しばらくのち、アモストとボストンの間にあるウースターという町で開業して、息子さんもそのあとを継いでいたもんだから、ケリー家はあちらへ帰ると、そのペリーさんの家へ寄るんですね。

——親戚みたいなものですね。

ケリー そういう関係でした。

——おじいさんが同志社へ着任されたとき、新島はもうこの世にいませんね。

ケリー 祖父が京都に住む許可が、政府からなかなかおきなかったんだ。

——どうして？ 宣教師だから……。

ケリー それもまああつたやろけど、「社会学」を教えるということだ。文部省が社会主義と混同しているわけだ。社会主義を教えるなんて、もつてのほかだよ。

——明治二十年代の前半に、もう社会主義ということがいわれていましたか。

ケリー ありました。アメリカよりヨーロッパのほうが盛んだった。文部省の役人の理解がおかしいということがわかつたので、祖父はこんこんとお役人に説明したんだ。そして、やつと許可がおりて京都へきたときは、新島先生はもういなかった。でも、新島先生自身が、祖父を雇い入れることについて政府と折衝したことがあつたともいわれているんですよ。

——でも、新島が亡くなった次の年のことでしょう。

ケリー そうなんだ。だからあんまりはつきりしたことは言えんけど。でも、新島先生は何度か岡山へ寄っているし、祖父やペリーさんは密接な関係があつたからね。

——金森通倫を岡山教会から同志社へ帰ってもらったか。



父フランクとケーリ名誉教授
(フランクがアーモスト大学から神学
博士の学位を受けるとき—1961年)

ケーリ だから、祖父を雇い入れることの
話は、新島先生が生きておられたときから、
それとなしに出ていたかも知れないしね。
——おじさんは同志社神学校の教授とし
て、その社会学のほか、教会史とか説教を
教えられ、何期かにわたって理事もされま
すね。神戸女学院でも。
ケーリ 神戸女学院の最初の理事長だった
ようですよ。
——私は門外漢ですが、『日本キリスト教会
史』(一九〇九年)その他、神学関係の著書も多
いようですね。退職なさったのは？

京都の家

ケーリ 一九一九(大正八)年七十歳のと
きです(同志社大学名誉教授となる)。自分で宣
教師の定年制を主張して退職したんだ。

——おじさんが同志社教授時代のケーリ
家のお住いは、烏丸今出川を下った所で……。

ケーリ いま、京都府民ホールALTI(アル
ティ)が建っている所です。

——お父さんフランク先生は、そこで生れ
たのですか。

ケーリ 父は、さっき言った祖父が岡山か
らアメリカへ帰つていたときです(二八八八年
生れ)。父は三男で、二人の兄は岡山で生れて
いました。兄たち(私にとっては叔父)が威張
ると、父は「大統領候補になれるのはぼくだ
けやぞ」といって、やり返していたらしいん
だ。その下が女の子でアリス。

——なんで「ぼくだけ」なんですか。

ケーリ そのころの大統領候補には、アメ
リカで、アメリカ人夫婦の子として生れた者
でないとなれなかった。だから「兄さんらは
岡山生れやから」と(笑)。

——京都のお家はその後、知事公舎になっ
て、今度は府民ホールに建て替えられて、随
分変つてしまいましたから、当時の物はなに
も残っていないでしょう。

ケーリ いやいや、エノキがありますよ。
家はなくなっちゃたけれど。

——ああ、府民ホールの北側の、大きい木。
あれですか。

ケーリ そう。

——エノキは残った……か(笑)。

ケーリ 父の兄弟が幼いとき、あれを三段
に分けて、一番上の三分の一は上の兄、中段
の三分の一は次の兄と、それぞれテリトリー
にしていたわけだ。父のテリトリーが一番下。

——上ほど偉いわけ？

ケーリ そうなんだ。「おれの方がお前より
高いんだぞ」というわけだね。ある時、兄が
二人とも留守だったもんだから、このときと
ばかり一番上まで父はのぼつたわけだ。「ざま
みろ」といい気になっていたら滑り落ちちゃ
って、危うく大怪我するところを、うまいぐ
あいに服が一番下の枝に引っ掛つて、それで
助かった。

——その時分から相当高い木だったでしょ

うから、落ちていたら大変ですね。

ケリー 父はスポーツが好きだったから、体が柔軟でね、だから助かったんだけど、落ちていたら、死にはしなかったかもしれないけど、大怪我をしたでしょうよ。

それで、戦後のことだけど、西宮に住んでいてちよいちよい京都へ来るんだけど、そのときあそこを通るとき、あの木を見て、敬意を表するんですよ。

——この枝のおかげで助かりましたと……。

ケリー まあ、そういうことでね。

——「フランク・ケリーの木」と書いておいてあげなさいな（笑）。

湯浅八郎先生のお宅も近くですね。

ケリー ちょっと南のほうでね。八郎さんとはく父は二つか三つ違いだった。叔母のアリスと同じ年だったか。八郎さんが宣教師の家を、回覧のようなことをさせられて回ってくるんだ、毎月一回。家賃を集めるとか、そういうこと。

——お父さんの湯浅治郎さんが、財務担当の理事だったから、手伝わされたんでしょね。でも、同志社に勤めている宣教師からは、

家賃はとらなかつたんじゃないですか。

ケリー そうだったろうけど、家は名義上は同志社のものだから、毎月、払ったことにするかなにかでサインをしなきゃならなかつたんだ。

父フランク

——おじいさんは三十年近く神学部教授をされ、理事もされて、エノキがある烏丸の家に住まれたわけですが、その間、お父さんたち兄弟の教育はどのようにされたんですか。

ケリー 小学校の教育は家でやりました。アメリカ人の家を持ち回りで、アメリカから通信教育の教材を取り寄せたりして、お母さんたちが、一生懸命に教えたんだ。

——中学から大学はアメリカで。

ケリー そうそう。そして、長男のジョージはアメリカで牧師になり、次男ワルターはやはりアメリカで医師、三男フランクがぼくの父で日本へ帰って宣教師になります。その次のアリスも日本で社会事業に従事しました。

——おじいさんは同志社の現役だから、お

父さんたちご兄弟だけがアメリカへ帰られて……。

ケリー 長男のジョージがうまいこと親がわりをしたわけだ。それで、父がアーモスト大学を卒業すると、「フランク、お前はまだ日本へ行つて宣教師がやれるほどの度胸も準備もできていない。だから、日本へ行つてちよつと英語の先生をしながら両親を慰めてこい」とジョージにいわれて、大阪で二年間、英語を教えたんだ。北野中学と天王寺中学でね。

——大阪の名門ですね。

ケリー 偉くなつた教え子がいますよ。大阪で教えながらウィークエンドに両親のところへ来て。

そんなふうに行っているとき、ぼくの母になる女性とロマンスが生れたんだ。彼女は最初松山にいて、それから神戸女学院の先生になつて神戸へきてね。それで父は大決心をしてアメリカへ帰つて、オペリン神学校に三年間学んだ。

——ラブ・ロマンスはどうなつたんですか。彼女を連れて行つたんですか。

ケリー いやいや、日本へ置いといて、神



宣教師家族が避暑した比叡山のテント村（明治20年代）

学校を卒業して日本へ帰ってきて、そして結婚したんだ。

——それから夫婦で小樽へ……。

ケリー 北海道へ行くまえに、東京で二年間、日本語を勉強した。そしてまず札幌へ行かされた。東京でぼくの姉が生まれました。

——札幌にもおられたんですか。ケリー先生はよく札幌の悪口をいっておられたけど

（笑）。

ケリー いまでも言うよ（笑）。いたのは一年半ほどだけど。北海道には当時、十の組合教会があつて、ローランドという人が札幌でそれらの教会の面倒をみていたわけだ。父はローランド先生の見習いというかつこうでね。二番目の姉は札幌で生れた。

——小樽でケリー先生が生れるわけだけど、お父さんが小樽へ行かれたのは、ご本人の希望ですか。

ケリー そう。父は北海道庁のように、中央にいてあしろ、こうしろ式に指図したり、中央集権的なことをやるのが嫌いなんだ。だから、「私は小樽のほうがいい、近くにいてお手伝いさせていただきますから」ということでね。

——一九二〇（大正九）年ですね、確か。

それから約二十年も小樽におられたんだから、お父さんにとっては第二の故郷……。第一は京都？ いやアメリカかな？ とにかく、ご生涯のうちで、一カ所にいちばん長く住まれたのは小樽でしょうね。ケリー先生にとっては生れ故郷で。

ケリー そういうことです。

——それから一九三九（昭和十四）年にご両親は松山へ移られて、太平洋戦争が始まる直前にお父さんはフィリピンへ行かれる。戦争さえなかったらなあ、と思いますねえ。

終戦直後の同志社とアーモスト大学

——オーテス・ケリー三世についてのお話をうかがう時間がなくなりそうで（笑）。ケリー先生は第二次大戦前に同志社へ来られたことがありましたか。

ケリー 父から、祖父との関係で同志社についていろいろ聞いてはいたけど、来たことはなかったです。神戸のカナディアン・アカデミーにいたときボーイスカウトに入っていて、夏にボーイスカウトが比叡山で避暑生活をやった。それで京都へきたことはあったけどね。

——そのころも叡山で避暑することがあったんですか。明治時代おじいさんが同志社におられた時分はよくね……。

ケリー テント村をつくって、宣教師たちの家族がひと夏過ごしていました。ぼくはその跡を探したことがあるんだ。

——あれは新島先生がおられたところからの習慣ですね。新島が保証人になって、官有林使用許可願いを出しているんです。

先生が最初に同志社へこられるのは、一九四七（昭和二十二）年ですか。

ケーリ いや、もっと早い、一九四五（昭和二十）年の確か十二月ですわ。

——じゃ、終戦直後？

ケーリ そうです。ぼくはその年の九月に東京へきたんです、爆撃調査団の通訳として。

——なんですか、それは。

ケーリ 爆撃はどういう効果があったのか、爆撃だけで日本は降伏しただろうか、といったことを調べるわけだ。終戦直後にヨーロッパでもやっています。

この年の八月十六日、終戦の次の日だけど、同志社にアーモスト館ができて最初にアーモスト大学代表として住んだJ・M・トロッターから手紙をもらっていたんだ、ハワイで。彼はそのころアーモスト大学のチャブレンをしていてね。ぼくの父が彼を可愛がったものだから、彼はぼくを可愛がってくれていた。その手紙に、「君はきつと日本へまわされるだろうから、日本へ行ったら必ず同志社を訪問し

ろ。そして、同志社はアーモスト大学との関係を戦前のように続けたがっているかどうか調べて、私に知らせてほしい」と書いてあったんだ。

——いい手紙だなア。昭和八年ころ二年間同志社へ来ていただけだったというのに。

ケーリ だから、日本へくる宿題が一つふえたわけだ。一つは、ぼくは日本の捕虜収容所の仕事をやっていたから、親しくなっていた捕虜たちの手紙を、それぞれの家族に届けてあげること。三十何通あずかって来たんだ。

——爆撃調査団の仕事をしながら……。

ケーリ そのほうの仕事をちよいちよいサボったけど（笑）。新潟へも届けに行つたし。そんなことから電通社長の上田さんとも親しくなつてご厄介になつたし、式場隆三郎さんとも親しくなつた。式場さんの妹の婿で朝日新聞社にいた人が、二度目の招集でグアムで捕虜になつてぼくとこへ来ていたんです。

——二つ目の宿題が同志社訪問？

ケーリ トロッターさんから手紙をもらっていたので、式場さんと一緒に、十二月に京都へ来たわけや。そしたら陶芸家の河井寛次郎さんとこへ行くことになって、ぼ

くは陶芸のことなんて何も知らんのに（笑）。河井さんが戦後最初に会った外人はぼくやつやろ。

のちに香里中高の先生になる西郷さんという人がいたでしょう、歌が好きな。

——ああ、西郷辰三郎先生？

ケーリ 西郷さんがぼくを引っ張りまわしたわけや。そして同志社へも寄りました。ぼくと家族がのちに住むことになるアーモスト館が同志社本部になっていて、その二階で牧野虎次総長や奥村龍三部長と会つたわけですよ。ぼくは、「同志社はアーモスト大学と戦前のように関係を結ぶ気持がありますか」というふうなことを尋ねた。そしたら「大いにやりたい」というわけで、「じゃア、ぼくの東京の住所へ文書にして送つて下さい」といってね。

——なるほど、それが復活の糸口ですか。

ケーリ 話が終つたら、「女子部にデントン女史がいるので会つてやつてほしい」と言われるものだから、連れて行つてもらいました。デントンさんはもう寝たきりでね、でも祖父や父のことは憶えていて、「ああ、ケーリ。フランク？ おまえ、だれ？」（笑）。それから

ほくに、「マッকারサーは、こういうことをしなきゃならん、ああいうことをしなきゃいけない」と言うもんだから、ぼくはただ「そうですか、はい、はい」だけ言って（笑）。

——同志社からの手紙は届きましたか。

ケ—リ 届きました。十日ほどのちに。英文のタイプで二ページにわたるものでした。牧野虎次総長の名前で。

同志社へ赴任

——ケ—リ先生は、いつアメリカへ帰られたんですか。

ケ—リ 調査団の仕事は十二月で終わったけれども、ぼくは捕虜をどのように日本では受け入れるのか、どのようにして帰すか、といった仕事をちよつとやって、翌年（一九四六年）の三月に帰りました。そして、ワシントンでしばらく勤務してから、卒業にはワンセメスター足りなかったので捕うためにア—モスト大学へ帰ったんです。本当は一年半残っていたんだけど、一年分は海軍の日本語学校の分をカウントしてやろうということで。その年の夏に学期を終えました。

——同志社の手紙はそのときに？

ケ—リ 先に送っておきました。ア—モスト大学から受け取ったという連絡とともに、S・キング総長が一九四六年度をもってC・W・コール総長と交替することになっているので、「これは私の後任が決めるべきことだから、ちゃんと申し送りをしておきます」といつてきていました。

——じゃア、コール総長にケ—リ先生が報告なさって……。

ケ—リ 先のトロツターさんが聖公会の神学校教授に移るところでね、「おまえ、コールさんに日本の事情を話しておけ」と。コールは一九四六年七月一日、三十九歳で総長に就任しました。その年の八月だったかにアポイメントをとって会いに行きまして、日本の事情や同志社のことをいろいろしゃべったわけです。そのときは、コールさんはただ「うん、そうか、そうか」というだけだった。あとで知ったことだけど、ぼくが会いに行く前の晩、コールさんはプレジデントのファイルの中の「同志社」の分を家へ持ち帰って、全部読んだそうです。

——関心を持っておられたわけですね。

ケ—リ ぼくとしては、同志社はいま大変なようだし、ア—モスト大学から何かしていただきたかった。そういう話が出るだろうと、コールさんは準備していたそうです。

その前、まだワシントンに勤務していたときだけど、ちよつとア—モストへ帰った。したら、「最高裁のストーン判事に会っておくように」と言われた。ストーン判事はア—モスト大学出身で、ク—リッジ大統領の同級生ですよ。判事になる前にはコロンビア大学ロースクールの部長だった。ア—モスト大学の理事長でもあった。

——だから、直接会って話をしておくほうがいいと言われて？

ケ—リ 日本の事情だとか……。それで手紙を出しておいたら、「来週水曜日の十一時半に来い」と返事があつて。

最高裁なんていうところは、なにしろすごい所ですよ。ぼくは軍服を着た二十五歳ぐらいの若造だから、いちばん奥の部屋へ案内されて緊張したら、ストーン判事が「そこへでも座れ」と。

そこで日本のことか同志社のことを判事に二、三分しゃべったかな、したら「わか

った、同志社とはまた関係を結んでやらにや
いかん。ところで、マッカーサをどう思うか。

戦犯の裁判をやるって言っているらしいが、君
はどう思うか」とね。戦犯の裁判はだが、
だれの許可を得てやるのか、勝った国の者が
勝手にやることのできるのか。そういったこ
とがちやうど問題になっているときだった。

——同志社どころじゃない、これは重大な
国際問題だから。

ケーリ ストーン判事の意見は、戦犯の裁
判はアメリカ憲法、アメリカ最高裁とは関係
がない、ということでした。

そんなことがいろいろあつて、ぼくはアー
モストを卒業してイエール大学の大学院へ行
ったわけだ。そこで戦争中の休暇に結婚して
いたアリスと、やつと一緒になれたわけ。彼
女は医学のコースを終えてインターンになっ
ていました。

コールさんが総長になって一年たったこ
ろ、「おまえ、同志社へ行かないか」と言っ
てきたんですよ。ぼくはイエールへ来てまだ一
年もたっていないし、決心がつかないものだ
からぐずぐずしていたら、コールさんから電
話で、「おまえ、行くのか、行かないのか」(笑)。

じゃア、アリスと二人で日本へ行こうと……。
あれからもう四十五年でね(笑)。

——お父さんはそのとき日本へ行つておら
れたんですか。

ケーリ 父は健康をとりもどして、一九四
六年に日本へ行っていました。父のような牧
師、伝道師は日本に入りやすかったんだ、マ
ッカーサーが日本人は精神的に落ち込んでい
るから、キリスト教で元氣をつける必要があ
るという方針で、「ミッシヨナリーがほしい、
千人でも二千人でも送ってこい」(笑)。そん
な調子で、軍関係かミッシヨナリー以外は歡
迎されなかった。

ぼくたちは軍でもミッシヨナリーでもない
から、おどかされちゃつて、「自分たちの食糧
は、各自一トンずつ持つてこい」というもの
だから、サンフランシスコで慌てて缶詰など
を買い集めて、そりやもう大変なことだった。

——奥さんの給料もアーモストから？

ケーリ 女房は同志社の厚生館をベースに
して医療奉仕をするということで、それなら
アメリカン・ボードから出しようとして……。

——それから定年を迎えられるまで、同志
社のために国際交流をはじめ本当にご尽力下

さつたわけですが、感無量というところでし
ようか。

ケーリ 祖父は聖書でも七十を一生として
いるのだから、ミッシヨナリーも七十歳を定
年にすべきだと定年制を設けてアメリカへ帰
つたのです。そしてロスアンゼルスとユタ
州のオグデンで日系人のために教会をつくる
などしました。

「いい種は、蒔くべき所に蒔けば、ひとり
育つ」というのが祖父の信念でした。

ぼくも、おかげさまで、このアーモスト館
で四人の子供が生れ、成長して、それぞれ日
本人と結婚するなどして祖父からの志を受け
継いでくれているから、感謝しています。た
だ、アーモスト館のことが心残りですね。

——四十五年間の同志社時代についておう
かがいする時間がなくなりました。また機会
があればと思います。ありがとうございまし
た。

(一九九二年七月三十日、アーモスト館ゲスト・ハウス
にて収録)